



# 日々の想い



志摩乃太郎

「もう朝だよ」と

日差しが窓の隙間から頭をなでる

「今日はすがすがしいね」と

風が通り過ぎ様に頬にふれる

「今日も一日が始まったね」と

太陽が笑いかける

少しだけ大きく息を吸い込み

体の中から昨日の記憶を吐き出し

心を真っ白にしてあげる

「おはよう」

心に告げて

今日もまた新たにスタートラインをくぐる

小さな幸せがあるから

大きな不幸を少しずつ和らげられるのかな～

毎日発見できる小さな幸せって

朝、目が覚めること

体を起こせること

ご飯を食べれること

言葉を発せること

音が耳に入ること

目の前に

いつもの部屋の風景が広がってること

家族と会えること

トイレにいけること

風を感じる事

車を運転できること

空を眺められること

友達と話せること

メールができること

ほんとに当たり前だけど、

平和だから与えられてる小さな幸せ

人って毎日が忙しくなると

なんでもないこと

それが幸せってことを忘れちゃう気がする

少し立ち止まればわかることも

世間がそうさせてはくれない

ふと気がついたときに

自分が小さな幸せの一時に出会えたら

小さな幸せに感謝しようと思う。

そして、まわりに感謝

自分に感謝

小さな幸せありがとう

人間ってめんどくさい

好きだの嫌いだのの感情があって

喧嘩して

笑って

もし、感情がなかったらどんなに楽だろうか  
でも、感情があるから

優しさや

寂しさ

悲しさや

愛おしさ

その他のさまざまな表現へとつながる

そしてこうやってウダウダ考えることも

一つの感情なのかな？

あー人間ってたまにめんどくさいよね

それでいいんだよ

---

急いで上へ上へ上っても

どこかでつまづくかもしれない

だからって立ち止まってたら何も無い

ゆっくりゆっくり

一段一段

周りが早くて焦ったり

周りが帰って来たら

止めたくなるかもしれないけど

君は君でいいんだよ

ゆっくりゆっくり

どれだけの時間がかかるかなんてわからない

けど、焦ってもいいことはない

でも、諦めたらそこで終わり

だから諦めずに進めばきっと見える

君のゴール

忙しい毎日から少し離れてみる

何かをしたいわけでもなく

いつものように何かをしてるわけでもない

ただ、ただ、ぼーっと空を見上げる

しばらくして、ふと気づく

僕がこの地球に生きてること

空はどこの世界とも必ずつながってること

そして、何も無いこの日常に

何も無い時間も悪くない

暇を持て余すという時間こそが

贅沢であり

その贅沢を味わえる僕はきっと

幸せなんだなって思う

温かい物語や言葉を見れば

心に染みて優しくなれる

優しい言葉や笑顔を見れば

心が温まる

きっとそれは

心が寂しくて凍えてるのかも

心は兎と同じ

寂しすぎたら

空っぽになる

だから心は大切

大事にゆっくり温めよう

夢行き電車にのって

窓の外の君に手をふる

遠くなる住み慣れた町

夢への期待と

故郷への切なさ

二つが混じれば

不思議な感じ

人は皆、ないものねだり

そんなことを想いながら

窓の外を過ぎる過去に

小さく微笑む

空から降る様々な想いは

タンポポの綿のように

フワリ

フワリと

光のように透明で

キラリ

キラリと

輝き

今日もあなたの元に届きます

雨ってなんでこんなに

悲しく思われるんだろう

雨は悲しみの雨

涙の雨

でも、雨を恵みという人もいる

恵みの雨

雨が悲しく思えるのは

心が泣いているのかも

雨が恵みに思えるのは

心が乾いているのかも

どんな雨でも触れ合えるということは

今、生きていること

雨だって一時の感情

手を取り合ってゆっくり行こう

笑うことは大事

笑えることは幸せ

笑うことで

心は晴れ上がる

笑うことで

幸せを感じることができる

笑うことは大事

笑えることは心の健康

誰かが言ってた

誰だって孤独と戦ってるって

誰かが言ってた

誰だって寂しいんだって

誰かが言ってた

小さなことを見つけれるのが幸せだって

誰かが言ってた

人はきっと小さな不幸で大きな不幸を感じる

けど、小さな幸せでは大きな幸せを感じない

きっとそれは人が欲に覆われてるからだって

朝が来て太陽が昇る

太陽の日差しが鮮やか

けど 大人になるにつれて

素直に喜べなくなる

素直に楽しめなくなる

晴れた日にはしゃげない

雨の日は心も雨

大人の天気は難しく寂しいな

街からはビルに隠れて見えない空を

風に誘われて眺めてみると

大きくて青々としてる

いつもの人のようにせわしなく

右往左往する雲もいれば

のんびりとマイペースな雲もいる

それはまるで街中を忙しく行き交う人のよう

いつもは下を向いて歩いて

心が悲鳴をあげてたけど

今日は上を向いてみると

なんだかこの空の青さに

自分の心の雲が吸い込まれていくみたい

大きな空の下で

小さな小さなことで悩んでるのって

なんだか恥ずかしくなってくる

空に向かって大きく息を吸い込んで

ゆっくりと心の雲と一緒に吐き出す

さあ、歩こう

ゆっくりでいいから一歩ずつ

この先に広がる道をゆっくりと

意地悪風船は突然膨らむ

割ればいいのに膨らむばかり

嫉妬、やきもち

意地悪風船はますます膨らむ

人の心に住み着いて

なかなか割れない意地悪風船

たまに恋が暴走するのは

意地悪風船のせいかもね

あたたかな日差しに包まれて

静かな眠りに誘われる

優しい匂いが周りを囲い

小さな幸せの世界へと導く

何気ない匂いだけど

洗濯物の匂いが香ると

不思議な安らぎと

母の温かみを思い出す

何もない午後の

小さな幸せ

心に秘めた想いは

シャボン玉のように

ふわり

ふわりと

心の空を舞う

高く飛び出せず

空に舞い始めたらはじけてしまう

勇気という水にひたせば

心のシャボン玉も高く飛べる

今日は勇気という水につけて

シャボン玉を飛ばします

君の元へ届くように

白い息が舞う夜空の下で

赤みを帯びた手をさすりながら

全てを飲み込むような

大きな夜空に輝く星々

ひとつだけひととき目立って輝く星

きっとあれは君なんだね

何気なく話していると

僕の声が届くかのように

光輝く

少しだけ笑いかけてみる

君の笑顔を思い浮かべながら

寂しくなんかないよ

君と僕はいつも空で繋がってるから

人生ってなんだろう...

時々立ち止まって考えてみる

生きること

死ぬこと

何が幸せで

何が不幸なのか

勝ち組って何？

負け犬って何？

一人一人が違う色を持つこの世界で

全てを同じ色で統一させて競いあうことが

正しいことなんだろうか...

誰かが幸せになればそれでいい？

自分だけが幸せになればそれでいい？

答えなんてないんだけど

でも、たまに人生について考えてみる

あ、雲がゆっくり流れてる

追い越すでもなく

追い抜くでもない

自分のペースで周りを気にせずゆっくりと...

答えのない疑問だからじっくり考えよう

そのうちきっと自分なりの答えが出てくるさ  
明日天気になーれ

青々とした川のような空を

ぼーっと眺めていると

君の笑い声が聞こえてきそうなくらい

空は澄み渡ってどこまでも広がっている

あ、一つだけゆっくりと流れる雲がある

まるでこちらを見つめてるように

その雲に君の名をそっと呼んでみる

なんだか微笑んだように見えたから

頭と心をからっぽにして静かな朝をあるけば、

耳にはめたヘッドフォンから聞こえる音楽が

全身にしみわたる

まるで空腹時に体にかかる水分のように

揺れる雲の下で何も考えずに歩く

ただなんとなく歩こうと

頭をみたしながら

歩こうとも道は前に続く

まるでそれが人生かのように

## お家へ帰ろう

---

お日様が静かに眠りにつくとき

空は赤から黒へと変わる

横についていた影は

お日様の寝室移動と共に

空の黒とゆっくり同化していく

少し前までは人があふれていた公園も

いつの間にか静寂に包まれる

「さあ、帰ろうか？」

気づいたら母の手が差し伸べられている

ゆっくり顔をあげて

「うん」

とうなづくと

優しい母の手が包んでくれる

お家へ帰ろう

いつもの場所へ帰ろう

電車の窓から見上げた夜空に

星は誰一人として顔を出さない

あ、雨が窓を叩いた

きっと星が

都会の空に存在を忘れられて泣いてるのかも

でも、みんなは君を待ってるよ

だから早く出ておいで

大きな星空を二人で眺めてると

いつの間にか君は

すやすやと

静かな寝息をたてて

僕の肩にもたれて寝てる

いつもは早く寝たいけど

今日は苦い大人の味のコーヒーを片手に

少し夜更かししよう

もうちょっとだけ

長く君の寝顔とにらめっこしたいから

どうしてだろう

人は人生の先に見える

未来という光を探しはせず

過去にこだわり

周りにしめされた未来を見て

未来は悲しいものと思うのは

どうしてだろう

自分で選んだ道の苦しみに

耐えようともせず

未来は暗いものだと思いつけるのは

まわりのすごい人ばかりと比べて

自分は劣ると思い

自分の道さえも閉ざしてしまう

君は君であって

君は他の誰でもない

だから

周りを見る前に

君の前にある未来という道を見ようよ

きっと暗くはないはず

きっと悲しいものじゃないはず

人のものはなんだってよく見えるだけ

君の道を君の歩幅で歩けば

きっとわかるよ

君の先はどんだけ輝いてるかが